

小久保は食堂を出て、自分の部屋の隣にある二〇六号室の前に来た。ドアの横にあるネームプレートを見上げた。ネームプレートには藤田清の名前が書かれていた。他の名前がない、個室か。小久保はドアをロックした後、ゆっくりとドアを開けた。部屋の中を覗くと、車イスに座っている藤田の後ろ姿が見えた。

「小久保だが、入ってもいいかな」

「どうぞ」藤田は背を向けたまま言った。

小久保は藤田に近づいた。藤田はウォールナットのコーヒーテーブルの上に置かれている格子型のケージを見つめていた。ケージの中には一匹の白い二十日ネズミがいた。その二十日ネズミはケージの中でチョロチョロ動き回っている。

「これが飼っているネズミか」

「マウスだ」藤田は二十日ネズミを愛しむ眼差しで言った。

「マウスもネズミも同じだろ」

「いや、そうじゃなくて、こいつの名前がマウスなのさ」

「そのままの名前だな」

「名前を色々と考えたけど結局思いつかなくて、単純にマウスにしたのさ」藤田は小久保に顔を向けた。「可愛いだろ」

小久保はあらためて二十日ネズミを見た。手のひら大の大きさしかないマウスは、小さな身体を忙しく動かしている。小久保は口元をほころばせた。確かに愛くるしい。

藤田はケージのそばに置いてあるロールパンを麻痺のない右手で小さくちぎった。「マウスは私の家族だよ」藤田は小さくちぎったパンをケージの中に入れた。マウスはすぐにパンに気づき、前足でパンを掴むと、小さな口を小刻みに動かし食べ始めた。

「このネズミはどうしたんだ」小久保が尋ねた。

「孫のプレゼントさ。半年くらい前に息子夫婦が孫を連れて面会に来たんだ。その時、私がここに一人でいるのが寂しいと思って買ってきてくれたんだ」そう言うと、藤田は顔をほころばせた。「この高そうなテーブルも孫が買ってくれたんだ。可愛い孫だ」

「そうだな」

藤田の顔から笑みが消えた。「でも、ここ数ヶ月誰も面会には来ていない」藤田はロールパンをちぎりマウスに与えた。「何の連絡もない。まるで忘れられたかのような」

小久保は返す言葉が見つからず、黙って藤田がマウスにパンを与える姿を見続けた。

「時が経つと疎遠になってしまうのかな。だってそうでしょ。息子夫婦の日々の生活の中

に私の存在はない。一緒に暮らしていないから仕方ないことだ」藤田はちぎったロールパンを自分の口に入れた。「でも、こいつが居れば寂しくない。今じゃこのマウスが私の唯一の家族だよ」

本音は寂しいはずだと小久保は思ったが、口には出さなかった。今この場で言うてどうなる。「マウスの餌はいつも食事の残りを与えているのか、専用の餌はないのか」

「餌は施設から貰える。でも毎日同じ餌じゃ、私だって毎日同じ物を食べていたら必ず飽きてしまうよ。だから時々こうやって職員の間を盗んではここで出る食事をマウスに与えているんですよ」

「驚きだな、ここは動物を飼うことを許可しているんだ。ここに入所している者は規則だらけで縛られている身とっていたんだが」

藤田は小久保を見つめ、にやりと口元を緩めた。「来て早々、あなたは何度も規則という言葉を出している」藤田はゆっくりと背もたれ深く寄り掛かった。藤田の顔に得意げの表情が表れていた。「二十日ネズミを飼うと知らされた施設からの返事はノー。その理由は色々言っていたけど、私は頑として折れませんでした。どのように抵抗したかと言うと」藤田はそばにある床頭台に行き、そこの引き出しを開けると何かを探し始めた。「あった、あった」藤田は引き出しの中から、A4サイズ程度のパンフレットを取り出すと小久保に差し出した。

小久保はパンフレットを受け取り、表紙を見た。それはここのパンフレットだった。

「見たことは」藤田が尋ねた。

「確か見たことはあるが、読んではいない」小久保はこのパンフレットを見たことはあった。それは入院している時に、明子から渡されたが、小久保は全く見る気がなく、すぐにゴミ箱に捨ててしまったのである。

「表紙をめくってみてください」

小久保はパンフレットを足の上に置いてパンフレットをめくった。

「一番大きな文字を読んで見て」

小久保は大きく書かれている文字を読んだ。『すずらんでは自分らしい生活の提供をいたします』ここの施設のキャッチフレーズか。小久保は藤田に目を向けた。

「その文句をネタにして楯突いたんですよ。当時いたここの事務長に言ってやりました。私は自宅の生活で二十日ネズミを飼っていたんだとね。自分らしい生活の提供を実践するのならば、私が二十日ネズミをここで飼うことこそ自分らしい生活ではないかっ！ て

ね」

「えっ、自宅でもネズミを飼っていた？」

「まさか、飼っていませんよ。嘘です。だって孫からの贈り物を手放すことは絶対にできません。孫のためにも徹底的に抵抗する覚悟でした。それくらいの嘘をついても罰は当たらないでしょ。そして」藤田は少し間を置いて言葉を続けた。「私の世代は言葉を武器として闘った世代、学生運動の世代ですよ。ただ相手の言うとおりに従う世代じゃない」藤田はそう言うと口元に笑みを浮かべた。「小久保さん、あなたも同じ世代に見えますけど」

小久保はうなずいた。「ヘルメットを被り、タオルで顔を隠して言葉を撃ちまくっていた。デモ行進したり、時にゲバ棒を持ってね」

「あなた、その時学生として参加した？」

「ああ」

「ほう」藤田の眼が興味を示す視線を送っていた。「ちなみにあなたが活躍した大学は」

「東大」

藤田の目が大きく見開いた。「安田講堂ですね。学園紛争の天王山とも言われた闘い。すごい、あの砦で機動隊と闘っていたのですね。私はテレビで見っていましたよ。あの中で闘った人が目の前にいるなんて」

小久保は安田講堂の中で機動隊と闘ってはいなかったことを言いかけたが、口を閉じた。安田講堂の中にはいなかったが、全共闘として闘ったわけであり、ゲバ棒を持ってデモ行進もした。そう大差はないはずだ。あえて言うことはないだろう。俺だって講堂の中で闘いたかった。小久保はそれより気になったことがあった。藤田は全共闘をどう思っているのか。

「おれは全共闘だ」

藤田は深々と頷いた。

小久保は自分が全共闘と知った後の藤田の見方が気になった。「俺が全共闘だったと知ってどう思う」

藤田はしばらく小久保を見つめた後に言った。「ここは日本です。思想の自由は保障されています」

「行動も？」

藤田はいくぶん顎を上げ、目を細めながら小久保を見つめた。

「俺達は機動隊に投石したり火炎ビンをお見舞いさせた」

「結果的にね。私が思うに確かに人を傷つけることが正しいとは言いませんが、学生運動に関して言えば、学生達は私利私欲のためにゲバ棒を振り下ろしたわけじゃないと信じています。それをせざる得ない状況に至った経緯があるはずです。そこを考えてみると……難しいですね。まあ、私の考えと真逆に思う学識者もいますけど」そう言うと藤田は顔を天井に向け遠い目で再び話し始めた。「あの頃の日本は大きく変化し始めているのを感じさせられた時代だった。安田講堂はその時の象徴のように感じられる。大学の体制を変える、いや、日本を変える。その気概を持つ者達があの時代では台頭していた」

「君は運動に参加していたのかね」

「少しはね。その頃の私は長く入院してましてね。安田講堂事件は病室のテレビで見えていました。ただ入院前には私だってデモに参加した一人でしたよ」

「そうか、君もか」

「ただ全共闘ではありませんでしたけどね」

「そうか」長期の入院、デモで負傷でもしたのか。小久保は理由を知りたかったが、自分の口から尋ねることはしなかった。言いたくないこともある。

藤田が話しを続けた。「話しがそれてしまった。話しを戻しましょう。私はネズミとの共存の為にあなたが学生運動で闘ったように頑張りましたよ……そして最後には事務長に耳打ちしたんです。私は新聞記者に友人がいる。この件が自分の希望に添わなかったら、その友人に連絡する、とね。人だって施設だって叩けば埃の一つくらいは出るでしょ。埃を出したくない事務長は折れました。結果、二十日ネズミを飼うことを勝ち取りました。まあ、新聞記者の友人なんていませんけどね」満足感を漂わせた笑みを浮かべた。しかしその笑みは弱々しい笑みに変わり、ため息をついた。「小さい勝利ですよ」そう言うとマウスにパンを差し出した。

小さい勝利か、小久保はその言葉を反すうした。あの頃の学生達は小さい勝利の後、安田講堂で敗北した。

「大きい勝利を考えたことは」小久保が尋ねた。

藤田のマウスにパンを与えている手が止まった。マウスがケージのそばにあるパンを見つめ鼻をピクピクさせ始めている。「もうここの生活に慣れました。諦めたのかも」そう言うと、パンをマウスに与え始めた。

小久保は藤田を見つめた。学生運動が盛んだった頃、もし彼が入院していなかったら、安田講堂に立て籠もった学生と同様に反骨精神、強い意志をもって行動していたかもしれ

ない。しかし、今の藤田には、信念を貫く気概は見られず『穏やか』の言葉が似合うようだ。

「マウスの生活はこのケージの中だけ」藤田が言った。「天敵から狙われることもないし、食べ物だってある。確かに自由は制限されているけど、地獄でもない。私の生活もこの施設というゲージだけです。施設は天国じゃないが地獄でもない。ここの生活を割り切ることができるか、できないか、じゃないでしょうか」

小久保は何も言わず、藤田の言葉の続きを待った。

「叶わぬ夢ですよ。こんな身体になって病気になる前の生活を取り戻すことは、現実的に出来ないことを受け入れるしかありません」

「出来ない環境を作り上げられたと感じないか」

「このマウスのように？ このマウスだってケージという作り上げられた環境にいます。不自由だけど安全です。しかし、もし身の危険を感じたら、このマウスも生きる為に小さい歯で噛みつくでしょう。でも私は？ 私は噛みつく事を忘れた、いや諦めた哀れな年寄りになっています」藤田はため息をついた。「私はそれを考えないために割り切り、諦めの言葉を自分に言い聞かせているのかもしれませんが。でも」そう言うと、藤田は小久保を見つめた。「誰かが声を上げれば私の気持ちに変化がでるかも」

小久保は息を呑んだ。自分を見る藤田の眼差しは、丸眼鏡が似合う穏やかなものから強い眼力で自分を見据えていた。同じだ、今の藤田の目は安田講堂にいた学生達の日と同じだ！ そしてその眼差しは、まるで自分にやるべき事を伝えている感じだった。誰かが声を……まさか俺に期待しているのか。

「昔のように」そういうと藤田は小久保から目を離さず、つまんでいたパンを口に入れ、ゆっくりと食べ始めた。同時に藤田の目はいつもの温かい眼差しに戻った。「変化という風を感じれば、『生きる』を実感できそうですね」

藤田はパンを飲み込むと口元に笑みを浮かべた。「楽しみです」